左宗棠の進軍新疆の恢復

光緒元年（千八百七十五年）左宗棠は、伊犂將軍榮全、烏魯木齊都統金順、西寧道臺劉錦棠等と兵を會し、瑪納斯城を陷落す。蓋し瑪納斯城は、堅固無比回匪の據て以て死守する所、攻圍二箇月に亘り、彼我の死傷算なく、城陷るや、清兵只〻其の老幼婦女を釋すの外回匪は悉く斬戮し、回酋馬存戈、王奇玉、馬受等を斬り、韓刑濃、黒峻、安得磷等の死屍と共に之を梟す。同三年阿密爾阿古伯は、其臣金蕃搭（キンバンタラ）の殺す所と爲り、嗣子比固克（ビクク）利伯克（リベク）位を繼ぎしも、威望揚らず、且つ内訌ありて將さに瓦解せんとするに際し、左宗棠が新勝の勢に對して、爭か能く抵抗し得べけん、彼は遂に露境に走れり。是に至りて清廷は、全部新疆を恢復したり。

清露の折衝

翌四年、左宗棠は兵約三萬を南北兩路に分屯せしめ、使を露將カフマンに遣し、請求するに伊犂其他の侵地還附と阿古伯一族の拿捕送附とを以てしたるも、容易に妥協すべくもあらず。因て清廷は、崇厚を特命全權大使に擧げ、翌年露京に着し、茲に所謂「リワシャ」條約を議定せしが、同條約中不利の條項多かりし爲め、遂に批准するに至らず。左宗棠は開戰奏議を上り、李鴻章を除くの外は、廟議一齊開戰論に傾きたり、是に於て清廷は駐英公使曾紀澤を全權大使に任じ、更に露京にて新に